

賢首大師法蔵の「十重唯識説」について

中 村 薫

一

中国華嚴宗の大成者賢首大師法蔵（以下法蔵と略す）は、心識論について如何なる見解を示しているのであるか。小論では、特に『探玄記』に説かれている「十重唯識」について若干の考察を試みてみたいと思う。

なお、この「十重唯識」について、我が国で最も関心をもっていた人物として、東大寺戒壇院の凝然（一二四〇年～一三三二年）が挙げられるであろう。つまり、凝然は三聖円融觀と共に唯識觀を重視し、

一、『華嚴十重唯識瑞鑑記』卷一、正応五年（一二九二年）三月二十六日述 凝然五十三歳

〃 卷二、同四月十七日

〃 卷四、同五月三日

〃 卷五、同五月十日

賢首大師法蔵の「十重唯識説」について

〃 卷七、同七月十八日

二、『華嚴十重唯識円鑑記上下』正応五年（一二九二年）五月八日

三、『華嚴十重唯識瓊鑑章』正応五年（一二九二年）六月十一日

四、『華嚴法界義鏡』（第五觀行の狀態）永仁三年（一二九五年）二月二十四日凝然五十六歳の著述をもって「十重唯識」について述べている。

このように、凝然は、五十三歳〜五十六歳の間に、集中的に「十重唯識」について註釈を頭わしている。そこに問題の重要性が知らされるのである。

以上の点を踏まえ、今回は煩瑣を避けるため前述の四書のうち、特に『華嚴法界義鏡』を参考にしながら「十重唯識」について考察していくこととする。

先ず唯識の法門の源泉を探ってみれば、『八十華嚴經』卷十九の覺林菩薩の偈讚の出ずる「夜摩天宮中偈讚品」に 若人欲^三了^二知三世一切仏、応^レ觀^レ法界。一切唯心造（大正10・102・a〜b）とあり、また、『六十華嚴經』卷十の「説偈品」に、

如^レ心仏亦爾、如^レ仏衆生然。心仏及衆生、是三無^二差別^一。諸仏悉^二了^一知一切從^レ心轉（大正9・465・c〜466・a）

とあるをみる。そこでは、心・衆生・仏の三の無差別を説き、而も唯識の道理を明らかにしている。次に大乘仏教の諸論、例えば『二十唯識論』（玄奘訳）の冒頭には、

安^二立大乘三界唯識^一、以^二契經說三界唯心^一（大正31・74・b）

とあり、同じく『大乘唯識論』（真諦訳）には、

於^二大乘中立^二三界唯有^レ識^一。如^レ經言^二「仏子三界者唯有^レ心」（大正31・70・c）

とあるが、取りも直さずその「三界唯識」の依り所となっているのが、他でもない『六十華嚴經』卷二十五、「十地品」の第六地（現前地）の所の、

三界虚妄、但是一心作。十二緣分、是皆依^レ心。（大正9・558・c）

の文である。

法藏は『探玄記』卷十三で、

前中言^二三界虚妄但一心作^一者、此之一文諸論同引證^二成唯識^一。（大正35・346・c）

と述べているが如く、「三界虚妄一心作」の一文こそが「唯識」を明かすものであるというのである。

また、『六十華嚴經』卷十、「夜摩天宮菩薩偈品」の如来林菩薩の偈文に、先にも述べたが、

心如^二工画師^一 画^二種種五陰^一

一切世界中 無^二法而不造^一

如^レ心仏亦爾 如^レ仏衆生然

心仏及衆生 是三無^二差別^一（大正9・465・c）

とあり、また、

若人欲^三求知^二 三世一切仏^一

応^三当如^レ是觀^一 心造^二諸如来^一 (大正9・466・a)

とあり、唯心縁起の理を顯わしている。

以上の如く、『華嚴経』の中に数多く散見している唯識の道理に対し、法藏は「十重唯識」の法門を立てて「唯識」を明らかにしている。

今、「十重唯識」の名を列挙すれば次の如くである。

一 相見俱存唯識

二 摂相帰見唯識

三 摂数帰王唯識

四 以末帰本唯識

五 摂相帰性唯識

六 転真成事唯識

七 理事俱融唯識

八 事融相入唯識

九 全事相即唯識

十 帝網無礙唯識

元より、これらの法門は『義林章』一卷末の「唯識義林」（大正45・258・b）の「五重唯識」の影響を受け、それを参考に行っていると考えられるが、今はそれらの関係に立ち入ることなく直ちに「十重唯識」の一々の内容の検討に入ることとする。

二

一 相見俱存唯識

法蔵は、

一 相見俱存故説「唯識」。謂通「八識及諸心所并所變相分」本影具足、由「有支等薰習力」故變「現三界依正等報」如「攝大乘及唯識等諸論広説」。（大正35・347・a）と述べている。

元より仏教の心分説についていえば、古来より「安難陳護一二三四」といわれている。故に、安恵論師に限っていえば、見分、相分の二分を遍計となして否定して自証分の一分のみを立てている。而るに、法蔵によれば、今この相見俱存唯識では、所縁相分も能縁見分も共に依他性として俱存することによって、唯識の義を明らかにしている。従って、難陀の二分説、陳那の三分説、護法の四分説を指し、相見二分を分別性とする安恵の

説は除くのである。

重複するが、相分見分の二分は共に八識心王の心所に通じる能縁所縁の關係をいうものである。従つて、本質（第八識所変の相分の如く、生有の一念の異熟識を起こすとき、第八識が種子・五根・器界の三種の境相を頓時に変現することをいう）と、影像（転識が各々その境を縁ずるとき、第八識所変の境をもつてその本質となして、彼の影像の相分を變現することをいう）の共を具し、十二因縁として流變輪廻する有支薰習の力によつて、三界の依正等の報を變現するといふのである。

法藏は更に『撰大乘論』中の、

名事互為客 其性応尋思

於一亦当推 唯量及唯假

実智觀無義 唯有分別三

彼無故此無 是則入三性（大正31・143・c）

の偈文により、所取能取の空を觀ずるものであるとし、また『成唯識論』卷第七の、

是諸識轉變 分別所分別

由此彼皆無 故一切唯識（大正31・38・c）

の偈文をもつて、相見俱存の義を立ててゐる。

この相見俱存の唯識について、凝然は、

此門意者、為_レ欲_レ破_レ折諸愚夫等心外実我実法執着_一直顯_中心内甚深諸法唯識道理_上。(日藏四十二・五九七・

上)

と端的に示している。そして、凝然は、遍計所執性、依他起性、円成実性の三性に配して唯識の道理を明かした後、三つの問答をもつて詳細に解説を加えている。

(一)に、心識の内に一体どれだけの法があるのか問うのである。

問に対して、

答。若約_二実法_一不過_二三種_一。一曰色法、二曰心法。若取_二分位_一即成_二三法_一。加_二非色非心不相応行_一故。若分_二相應_一即有_二四法_一。心王之外有_二心所_一故。上之四種、並依他_レ法。即是有為聚集之相。若取_二識性_一即成_二五種_一。加_二真如無為円成実性_一故。(日藏四十二・五九七・下)

と答え、実法に約して、色法と心法の二種類を挙げている。そして、分位に関して、非色非心の不相応行を加えて三法ありとしている。次に、相應について分別するのに、心王外の心所を加え四法とし、最後に至つて真如、無為の円成実性を加えて五法ありとし、総じて唯識を明かすのに五位百法を立てるのである。そして、更にその五位百法の法相は、相分・見分・自証分・証自証分の四分に尽きるといふ。

(二)に、この相見俱存識は、安惠(自証分)、難陀(相・見二分)、陳那(相・見・自証の三分)、護法(相・見・自証・証自証の四分)の諸師の心分説のうち、何れの所立によるのかと問うのである。

問に対して、

答。此相見門依「護法義」。收「攝四分」為「相見」故。以「見分中攝」後三故。諸經論中多說「二故」。由「此義」故清涼師云「相見俱存唯識正義」。(日藏四十二・五九八・上)

と答えている。つまり、護法の心分説を主とし、相見俱存そのものをもつて唯識の正義とするのである。

(三)に、識所縁の境にどれだけの種類があるのか問うのである。

問に對して、

答。所縁之境總有「三種」。一者性境。從「実種」生有「実体用」。能縁之心得「彼自相」、即五八識所縁境界。二「独影境」。与「能縁心」同一種生無「実体用」。能縁之心不得「自相」無有「本質」。影独起故。即如第六縁「龜毛」等。「三帶質境」。謂能縁心不得「自相」。而其縁相即有「本質」。即第七識所変相等。總而言之。五八性境。第七帶質。第八通「三」。此等並是所変相分。然彼見分亦見所変。自体轉以「相見」起故。(日藏四十二・五九八・下)

と、性境・独影境・帶質境の三境に分けてそれぞれ説明を加え、前掲した『撰論』『成唯識論』によつて唯識を明かすのがこの相見俱存唯識の門の意義であるとしている。

さて、ここまで凝然の三問答を中心にこの門についてみてきた訳であるが、法藏は客觀的諸法の存在を否定し、主觀的存在を認め、万象悉く心内所變の現象となす相對的唯心の義を説いたものを相見俱存唯識といっている。

二 攝相歸見唯識

法藏は、

二「摂」相歸見故説「唯識」。謂亦通八識王數差別所變相分無「別種生」能見識生帶「彼影」起。如「解深密經」二
十唯識觀所緣論具説「斯義」。(大正35・347・a)

と述べている。

この門は、相分を摂して見分に歸せしめることによって識の義を明かす門である。もともと、相分見分共に八識心王の心所に通じるのは当然であるが、ただ相分は諸法の心境俱存の境を摂するため、心に歸して内境を存しないという。つまり、内境は心の所変であることにより、心を離れないため別種なく、能見の識が生起する時、心内所現の影像を帶して起るに過ぎないため、摂(相)歸(見)というのである。

ところで、凝然は、相分見分の同種別種の問題に関して、

問。色心諸法皆從「種生」。七「轉隨」應熏「相見種」。彼亦為「八熏」相見種。是故相分皆從「種生」。若無「別種」豈得「独影」。(日藏四十二・五五九・上)

と問を發している。その答えとして、

第一に、

相無「別種」心帶「影起」。即是親光論師所説。彼言。相分是虚而見分即実故。(日藏四十二・五九九・上)

と、親光の説により、相分見分は同種より生ずることによって相に別種がないという。相分は虚となり見分は実となることにより、唯識の義が安立されるというのである。これは難陀・陳那両師の所説も同じであるというこ

とである。

第二に、

然其相分別種生者即是護法菩薩所立。(日藏四十二・五九九・下)

と述べ、護法論師の説により、相分見分は別種より生ずるといふ。

これに対して『了義燈』(大正45・677・a)では、この二つとも否定し、或同或異の義をもって正としている。然るに法藏は、『解深密經』卷一の、

阿陀那識為依止。為建立故。六識身轉。謂眼識耳鼻舌身意識。此中有識。眼及色為緣生眼識。与眼識俱隨行。同時同境有分別意識轉。(大正16・692・b)

により、摂相帰見を証成し、更に前掲の、『二十論唯識』の、

安立大乘三界唯識。以契經說三界唯心。心意識了名之差別。此中說心意兼心所。唯遮外境不遺相応内識生時似外境現。(大正31・74・b)

の文と、陳那著『觀所緣論』の、

極微於五識設緣非所緣

彼相識無故猶如眼根等(大正31・888・b)

偈文などにより、摂相帰見を証成するのである。

凝然も、

彼相分中有「本及影」。此等相分_レ見不_レ立。其見分中「八識心王」。五十一心所。並存「見分」名為「唯識」。(日藏四十二・五九九・下)

と述べている。この門の主張は、相分見分の二分別種なき義を安立することによって、一見分のみを立てて、撰相_レ見の唯識説を説示することである。

三 撰数帰王唯識

法蔵は、

三撰数帰王故説「唯識」。謂亦通具「八識心王」。以下「彼心所依」於心王無_中自体_上故。許「彼亦是心所変」故。如「莊嚴論説」。(大正35・347・a)

と述べている。

前門において、見分は八識の心王と心所に通じ、相分を撰して見分に帰すことを明かしたので、この門では心所を撰して心王に帰すことを明かさんとするのである。

つまり、八識の心所は心王によるために自体がなく、従って、心王の所変であることを許すために心所を撰して心王に帰すというのである。

法蔵は、無著の『大乘莊嚴經論』巻第五の、

能取及所取 此二唯心光

貪光及信光 二法無二法

.....略.....

種種心光起 如是種種相

光体非体故 不得彼法実 (大正 31・613・b)

などの偈文により、撰数帰王説を証成するのである。

凝然も、法藏と同様に、

何故如是各帰心王。心数依王無自体故。一一心所心所変故。此二義故各帰心王。一切心所即帰心

王。無有別体。是故此門所留八識心王而已。一一心王並是唯識。(日藏四十二・六〇〇・上)

と述べ、心数の無自体であることにより、唯心王についてのみを唯識と説くのが、この門の主張であるというのである。

以上三門は始教に属すといわれている。

四 以末帰本唯識

法藏は、

四以末帰本故説唯識。謂七転識皆是本識差別功能。無別体故。(大正 35・347・a)
と述べている。

この門より後の四門は終教に属している。その所以は、前門までは八識心王に心所を撰すというけれども、前七識心王を第八識心王に撰すことは説かれていなかった。それは法相中の阿頼耶識は体別であるという立場に立つて説示されていたからである。故に前門までを始教に配したのである。

然るに、今、法蔵は、七転識を撰して本識に帰すことにすることによって唯識の義を成ずるという。つまり、七転識は本識の差別機能であることにより、別体ということがないために末を撰して本に帰し、唯根本識について唯識を説くというのである。

法蔵は、『楞伽阿跋多羅宝經』卷第一の、

蔵識海常住 境界風所動

種種諸識浪 騰躍而転生

.....略.....

譬如海波浪 是則無差別

諸識心如是 異亦不可得 (大正16・484・b)

の文を引用し、水を離れて別に浪があるわけでないのと同様、本識を離れて別の六七識もあるはずがないと説くのである。

凝然も、法蔵と同様に、

更執「我所」展転無絶。前六事識随境粗動。並是本識功能。作「成随縁流变」「成七転波」。以「末帰」本本外

賢首大師法蔵の「十重唯識説」について

無_レ物。一切唯是第八而已。（日藏四十二・六〇〇・上）

と述べ、末をもつて本に帰すのであるが、本の外に何ものもなく、あるのはただ第八識のみであると、八識体一説を強調している点が顯著に表われている。

ただ、法相宗五重唯識中に、撰末帰本説があるが、前述の如く、八識別体を立て、第七転識の体性を認めつつ阿頼耶識を説いており、第八識自体を本となすことは同じであるが、見分相分をも本となしている。従つて、今、終教の立場による七転識は無体説とは内容を異にしているという点については、注意を要するべきことである。

五 撰相帰性唯識

法藏は、

五撰相帰性故説「唯識。謂此八識皆無_二自体_一。唯是如来藏平等顯現。餘相皆尽。（大正35・347・a）と述べている。

この門は、相を撰して性に帰すことをもつて唯識の義を明かしている。つまり、八識はすべてみな相そのものであり、従つて自体がないという。故に相を撰して如来藏性に帰して而もただ如来藏心について唯識と説くのである。

法藏は『維摩詰所説經』卷上の、

諸仏知「一切衆生畢竟寂滅」即涅槃相不_二復更滅_一。（大正14・542・b）

の文と、更に『楞伽阿跋多羅宝經』卷第一の、

謂以「彼意識」思「惟諸相義」

不壞相有^レ八 無相亦無相（大正16・484・b）

の文を引用し、縁生は無性にして而も真如そのものである。また、真如は無相にして法に住しないため「無相も亦無相」というのである。

凝然も、

是故此門所^レ說唯識一切諸法真如實際無相寂滅不可思議。諸仏衆生平等一相。有情非情夷齊無^二。（日藏四

十二・六〇〇・下）

と述べている。

前門は一本識の唯心によつて事識を立てているため如幻縁生有為の法であつた。然るに今この門では、森羅差別の諸法はすべて同一如来識真如法性の外にはなく、従つて一切の差別を否定する平等の理性に帰すべき唯心説と主張するのである。

六 転真成事唯識

法藏は、

六転真成事故說「唯識。謂如来藏不^レ守^二自性^一。隨縁顯^二現八識正数相見種現^一。（大正35・347・a）

賢首大師法藏の「十重唯識說」について

と述べている。

この門は眞を転じて事相を成ずる義に約している。つまり、不変の理体である如来眞如は、永遠なる理性として止まらず、而も如来藏心の自性を守らず、随縁顕現して八識心王所相見及び種見などの事法を成ずるというのである。

法藏は、『楞伽阿跋多羅宝經』第四卷の、

如来之藏是善不善因。能遍興造一切趣生。譬如伎兒変現諸趣離我所。不覺彼故。三縁秘合方便而生。外道不覺計著作者。為無始虚偽惡習所熏。名為識藏。(大正16・510・b)

の文を取意し、如来藏を識藏と名づけるのは、無始より惡習に熏習せられるためであると述べるのである。そして、更に『大乘密嚴經』卷下の、

仏説如来藏 以為阿頼耶

惡慧不能知 藏即頼耶識

如来清淨藏 世間阿頼耶

如金与指環 展転無差別 (大正16・747・a)

を引用して如来藏阿頼耶識について述べ、更に『勝鬘經』の「自性清淨章」の、

自性清淨心而有染者、難可了知 (大正12・222・b)

の文、『宝性論』巻第四の中に出ずる『大乘阿毘達磨經』の、

無始世來性 作「諸法依止」

依「性有」諸道 乃証「涅槃果」 (大正31・839・a)

の偈文、『起信論』の、

依「一心法」有「二種門」。云何為「二」、一者心真如門、二者心生滅門、是「二種門」皆各總攝「一切法」。此義云何。

以「是二門不」相離「故」。 (大正32・576・a)

の文などにより、性である理に従って相である事を出し、理をとって事を成ずるというのである。

凝然も、

此門所立即轉「真如」成「有為事」。如來藏理「不」守「自性」隨「染淨緣」作「種種法」。若隨流門真隨「妄故若還源門真隨」淨故。約「覺上無作大用」。普現色全性身海故。真如隨緣作「一切相」。實際「轉變」。業用繁興。(日藏

四十二・六〇〇・下)

と、隨流門、還源門の二門に分けて述べている。凝然は、真如を轉じて有為の事を成ずるのがこの門の主眼であることを確認し、更に隨流門で真、妄に隨う真如隨緣の義を述べ、還源門で真、淨に隨う真如不變の義について述べている。そして、総じて真如隨緣して一切の相となり、真如より諸法が隨緣生起して業用が繁興するということである。

七 理事俱融唯識

賢者大師法藏の「十重唯識說」について

法藏は、

七理事俱融故説「唯識」。謂如来藏拳体随縁成_レ弁諸事。而其自性本不生滅。即此理事混融無礙。是故一心二諦皆無_レ障礙。(大正35・347・a)

と述べている。

前門では理が事を成ずることを明かしたが、この門は所成の事が理と融ずることを明かすのである。即ち、如来藏心の拳体随縁をもつて事法を成弁するのであるが、その自性は本来不生不滅の理に異なるものではないという。

そのことにより、事法というけれどもただの事ではなく理を全うする事でなければならぬ。反対に理といふけれどもただの理ではなく事を全うする理であり、所謂、理事混融無礙であるという。

法藏は、既説の第六門の『起信論』の偈文をここでも引用して、一心の法を、絶相の義としての真如門。随縁起滅の義としての生滅門に分けるのである。そして、各撰一切法について次の如く述べるのである。つまり、真如門は染浄の通相であるが、通相の外に別の染浄があるわけではない。生滅門は染浄の別相であるが、別相の法は生滅に摂せられるのである。故にこの二門は等しく摂して不二であることによつて一心となすというのである。

次に法藏は、『勝鬘經』の、

自性清浄心而有_レ染汚_レ難_レ可_レ了知_レ有二法_レ難_レ可_レ了知。謂自性清浄心難_レ可_レ了知_レ彼心為_レ煩惱_レ所染_レ難_レ了知。(大正12・222・c)

の文を取意して、次の如く解釈を加えている。

解云、不染而染、明_レ性淨隨_レ染挙体成_レ俗、即生滅門也。染而不染、明_レ即染常淨本來真諦。即真如門也。此明_レ即淨之染不礙_レ真而恒俗即_レ染之淨不破_レ俗、而恒真。是故不礙_レ一心雙存_二諦_一（大正35・347・b）法藏によれば、不染・染を生滅門、染・不染を真如門に配し、淨と染によって、真と俗の二諦の存することを礙げないものであるという。

次に『仁王般若波羅蜜經』卷上の「二諦品」第四の、

於_レ解_レ常自_一 於_レ諦常自_二

通_二達此無_一 真入_二第一義_一（大正8・829・a）

と、『攝大乘論釈』卷第一の、

智障極_レ盲闇 謂_レ真俗別_レ執（大正31・153・c）

の偈文をもつて証成としている。

凝然も、

理即前第五門相想俱絶湛然無_レ寄。事是前第六門諸識顯現。足_レ見_二此二無礙_一為_二此門相_一。（日藏四十二・六〇一・上）

と述べている。つまり、理事俱融であることと同時に、如来藏の隨縁は前の六門、自性不生滅は前の五門に配して、この二義をもつて俱融の所由としている。

八 事融相入唯識

法藏は、

八融事相入故説「唯識」。謂由「理性」融無礙。以「理成」事事亦鎔融「互不」相礙。或「一入」一切。一切入「一」。
無「所」障礙。（大正 35・347・b）

と述べている。

これまで述べてきた各門は理事無礙の義であつた。ところが、これからの三門は事々無礙である別教一乗における唯識の義である。つまり、事々無礙はどこまでも相入相即の理を出るものでなく、相入とは力用の有無により、相即とは体の空有に約するため、融事相入が先にくるのである。

先ず、この門は法性融通門によつてゐる。ただ、事のみ立てて理によらなければ、理外の事であるから融といふことが成り立たない。つまり、理は自性を守らずして一切法と作るため、また更に理は本来無礙であるため、所起の事法もまた無礙となるのである。

法藏は、更に『六十華嚴經』の「光明覺品」の、

一中解「無量」無量中解「一」（大正 9・423・a）

の偈文や、「毘盧舍那品」の、

於「此蓮華藏 世界海之内」

一一微塵中 見一切法界 (大正9・412・c)

の偈文や、「十地品」第八地の、

於「微塵中」 見有「三惡道」

天人阿修羅 各各受業報 (大正9・564・a)

の偈文などを引用し、一即一切・一切即一の論理の根拠として広多無量なることを証成している。

凝然も、

為「体状」。此門已後所説唯識事事無礙以為「相貌」。於中此門事事相入力用交徹陳「無礙相」理性円通虚融

無礙。(日藏四十二・六〇一・上)

と述べている。つまり理性円融無礙なることによって理をもって事を成ずるために、事もまた互に鎔融して相礙えないというのである。

九 全事相即唯識

法蔵は

九全事相即故説「唯識」。謂依「理之事事無別事」。理既無「此彼之異」。令「事亦一即一切」。(大正35・347・b)

と述べている。

前の相入門は用に約していた。今この相即門は体について約している。前が異体門であり、今は同体門である。

先ず、法性融通門によつて無礙を明かすのである。

法藏は『六十華嚴經』の「初発心菩薩功德品」の、

知「世界即是無量無辺世界」知「無量無辺世界即是一世界」(大正9・450・c)

の文を取意し、また、「十住品」の、

若一即多多即一(大正9・448・b)

の偈文により、相即の体による事々無礙の唯識を明らかにしている。

凝然も、

今即就「体故成」相即。依「理之事事無」別事。理既無「有」彼此之異「事亦泯」絶一多之別。(日藏四十二・六

〇一・上)

と述べている。つまり、この門は、理に此彼の異がないため、事をしてまた一即一切、一切即一となるというのである。

十 帝網無礙唯識

法藏は、

十帝網無礙故說「唯識」。謂「中有一切」。彼一切中復有「一切」。既一門中如「是」重重不可「窮尽」。余一一門皆各如「是」。思準可知。如「因陀羅網」重重影現。皆是心識如來藏法性円融故。令「彼事相如」是無礙。(大

と述べている。

第八第九門では、一重の相入、相即の義によって唯識を明かした。今は更に重重の相入相即の義を説くのである。

凝然も、

此等諸相皆如来藏識之法。自性本来円通鎔融。故令^下彼事一一如^レ理重重無礙^上。依正二報各有二分円。^一
と述べている。

帝釈夫の宮殿の網珠の重重に影現するが如く、これらの諸相は、事をして一一理の如くして重重無礙となるのである。所謂、世界・国土・家屋・衣食などの依報と、過去の業因によって感得した果報の正体である正報の二報にそれぞれ分限と円融があるという。

つまり、如来藏心性性円融するために、一の中に一切があり、一切の中の一にまた一切があつて、重重にして窮尽することがないというのである。その重重は取りも直さず一心により重現するのである。

三

以上、大雑把に法藏の唯心縁起説を十重唯識によって考察してきたのであるが、法藏は更に、

上來十門唯識道理。於「中初三門約」初教「説。次四門約」終教頓教「説。後三門約」円教中別教「説。總具「十門」約」同教「説。(大正35・347・b1c)

と述べている。これは大乘教中の所説の不同により開かれた法門であることはいうまでもない。ただ、今回は、法藏の『探玄記』に出ずる「十重唯識」の一々について、凝然の『華嚴法界義鏡』を参考にしてみてきたに過ぎない。なお、法藏が、慈恩大師基の『大乘法苑義林章』卷一の「唯識義林」において説かれる五重唯識に如何なる影響を受けたのか、あるいは至相大師智儼の唯識説との関係如何、あるいは清涼大師澄觀との相違点の一々について更に詳細な考察の必要性を感じたが、今は紙面の都合で割愛せざるを得なかった。不備は今後の課題としたい。

一九九一年六月十八日

中村 薫(本学助教授・仏教学)